

自立活動（構音指導）授業指導案

1. 単元名 「サ行音を出そうーカードバトルをしようー」

2. 本校の言語通級指導教室（以下呼称「ことばの教室」）の実態

通級児童数 23人

内訳 ①学年・男女・自校他校別（人）

学年	男子		女子	
	自校	他校	自校	他校
1年生	2			2
2年生		2	2	2
3年生	7	2		
4年生		1		
5年生		1	1	
6年生	1			
合計	10	6	3	4

②症状別（人）

症状		人数
言語障がい	置換	1
	歯間化構音	4
	側音化構音	11
	吃音	2
鼻咽腔閉鎖機能不全症 （口蓋裂・疑いを含む）		2
場面緘黙		3
言語発達遅滞（難聴含む）		0

構音指導を中心としているが、場面緘黙も3人通級しているため、構音指導以外の指導も行っている。

3. 鼻咽腔閉鎖機能不全症の疑いがあるA男を対象児とした理由

3年生のA男は、約2年半の指導を続けている。明るく元気な児童であるが、鼻咽腔閉鎖機能不全症の疑いがあり、入級時は子音が出せず、すべて母音化してしまっていたため、言語によるコミュニケーションに大きな支障がでていた。

口蓋裂も含め、初めて鼻咽腔閉鎖機能不全症の構音指導を行ったが、なかなか成果が見られない時期が続いた。長期の指導で、支援者自身も鼻咽腔閉鎖機能不全症について学びながら、支援の工夫を重ねてきた。やっとその成果が少しずつ見られるようになり、少しずつ発音できる子音が出てきたところである。さらに、A男の発音が明瞭になることを切に願っているため、多くの意見を聞きながら今後の支援に生かしていきたいと考え、対象児をA男とした。

実態を把握しておくことは、授業構想を練るに当たって大変重要である。また、実態把握の視点は構音障がいの状態によって違うが、医療機関などの専門家の意見や、保護者との懇談、さらに、言語通級での指導の経験が豊富な先生方に聞くなど、多面的に情報を収集することが大切である。

4. 対象児A男の実態

①A男の実態（主に就学前）

授業対象児は、自校3年生男子のA男。A男は入学時から現在まで約2年半の通級歴で、1年生時に週2時間、2年生時に週1時間、現在3年生では週1時間の通級をしている。

就学時健診の構音スクリーニングは簡易で0/10、再検査でもほとんどのことばが不明瞭であった。不明瞭さの内容は、子音が発音できず母音化してしまうものであった。例えば「ひこうき」は「いおうい」に、「さる」は「あう」になっていた。A男は、市の養護・訓練センター（以降「養訓センター」と呼称）に年少から通い、遊びを中心にしながら会話をする指導を受けている。養訓センターでは、ミルクせんべいをなめたり、風船を膨らませる訓練を行ったりしたが、筋力が十分でなかったためか、うまくできなかったと聞いている。

就学前の医療機関に関わる情報によると、最初は大学の障がい者歯科でみてもらい、当時は診断名がはっきりしなかった。その後、養訓センターの先生からの情報で別の大学へ年長の時に通い、そこで鼻咽腔閉鎖機能不全症の疑いがあると診断されたが、手術をするほどの症状ではないと言われたと聞いている。鼻咽腔閉鎖機能が不十分でないとの判断で、成長を待ち、口腔筋機能訓練をするという方針になった。

性格的には、何事にも真面目に取り組み、曲がったことが嫌いで、周りにルールを守ることを求めるが、大人に対しては負けず嫌いな面も見せ、負けそうになると泣いて待ったをかける姿もあった。

② ことばの教室での指導（1年時～2年時）

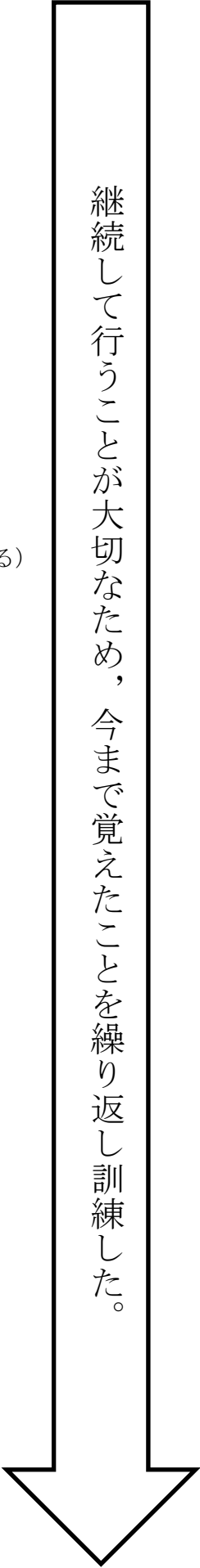
一般的に鼻咽腔閉鎖機能不全症の場合、軟口蓋が下がり気味で鼻咽腔が広がってしまうことにより、閉鎖機能が失われることが原因で呼吸が鼻に抜け、鼻音になってしまうということを資料で学んだ。A男ののどを見ると、軟口蓋が下がっているためにのどの奥が見えにくいことがわかった。よって、A男には軟口蓋を上げる指導が必要であると考えた。また、舌の力が弱いためか、舌出しをしても広い舌が出せなかったり、舌先を上にも上げることも難しそうであったりしたので、口腔筋機能を高める学習と正しい舌の位置や形を学習することが必要であると考えた。そこで、軟口蓋を上げる指導では、あくびの口を維持したり、あくびの口で話したりした。また、MFT（ORAL MYOFUNCTIONAL THERAPY：口腔筋機能療法）やお菓子を使つての舌や口輪筋の訓練を行った。1、2年時は、口腔筋機能の指導をしてもなかなか期待するほどの筋肉が付いてこなかった。しかし、少しずつ子音が出始めた。特に、奥舌を上げて発音するカ行の出し方を覚え、不明瞭ではあるがカ行が出始めたころから、舌の動きで発音できる音が増えることを実感し、意欲的に学習に取り組むようになった。ただし、1、2年時にはサ行の「s」や「j」の音素を出す風の音はほとんど出せず、「ヒュー」や「ヒー」の無声音が出ていた。

③ ことばの教室での指導（3年時）

3年生になり筋力が付いてきたこともあり、ようやく口腔筋機能の指導が本格的に行えるようになった。本人が納得しながら学習に取り組めるように、どうしてこの学習を行うのかを説明しながら訓練を行っている。その成果が少しずつ出始め、s音の音素も比較的是っきりしてきた。また、舌先の力がついてきたことで、相当の意識が必要ながらもサ行の音が少し出せるようになってきた。

④ これまでの具体的な指導

時 期	口 腔 筋 機 能 の 指 導	構 音 の 指 導
1 年 生	○舌や口の周りの筋肉をつける訓練 ・ガム噛み ・するめ噛み ・キャンディーなめ ・ミルクせんべいなめ ・米はぜつけ など 舌は「芋舌」の状態であった。（2年時まで続いた）	○マ行の単音訓練 口唇を閉じる鼻音が得意だったので、マ行から始めた。ただし、口輪筋も弱かったので、明瞭になるまでに時間がかかった。
9 月	○ブローイング ・ろうそく（火移し、ソフトブローイング） ・風船を膨らます。	○ヤ行、ワの単音練習 口腔筋機能が上がるにつれ、明瞭度も上がってきた。
1 月	○軟口蓋を上げる訓練 ・あくびの口 ・のどの奥を鏡で見る。 ・眉毛上げ ・鼻をつまんで話す。 ○MFT ・スポットポジション ・フルフルスポット ・ボタンプル ・ディップスティック（「棒押し」と呼んでいる） ・バイト（奥歯を噛みしめ、こめかみを触りながら固くなるのを感じる） 1、2年時は何度も「難しい」、「できない」と言ってあきらめることも多かった。そんな時は、どこの筋力を上げるためにやっているのかを説明し、「やり方だけでも覚えておこう」や「前回よりもこれだけ強くなった」という励ましを続けた。	○マ行、ヤ行、ワの単語練習 子音が少しずつ増えてくることで、発音できる単語を増やしていった。
		○教科書の読み練習 一生懸命に読むが、まだ全体的に不明瞭であった。この時期には、ことばの教室では自信をもって読めるように、はっきりしたマ行、ヤ行、ワが言えたことを認めた。
		○ハ行の単音練習 目を開いて軟口蓋を上げる準備をすることで比較的明瞭に発音できるようになった。

2年生 9月 1月	○チョコパンくわえ (舌と口輪筋を鍛える) 継続して行うことが大切なため、今まで覚えたことを繰り返し訓練した。 
--	--

3 年生	・ 出せる子音が増えてきたことで、短文練習や教科書の音読などを指導内容に入れてきた。 ・ 今までにも、ポケモンのカードゲームは行ってきたが、楽しんで話すことを目的としてきたため、ゲーム中の発音にはあまり触れずに行ってきた。
------	--

⑤ 構音検査における構音の実態

A 男は鼻咽腔閉鎖機能が完全ではないため、常に鼻声を伴っている。そのため、鼻咽腔閉鎖ができる人のような明瞭度はどの発音にもない。以下の「明瞭」とは、その中でも聞き手が判別できるかどうかの視点での明瞭を表している。

構音	できていること	課題となっていること
母音	明瞭に出る。	特になし。
カ行音	<u>単音</u> は出るようになった。 <u>語頭の k 音</u> は比較的明瞭である。	<u>文中では</u> 省略される時やタ行音やハ行音に変わるときがある。
サ行音	<u>単音では</u> 、s 音（サ・ス・セ・ソ）が少しずつ出せるようになってきたものの明瞭ではない。A 男がサ行を話していることは伝わるようになってきた。 「シャ・シュ・ショ」は明瞭になってきた。	<u>短文中では</u> 省略され、母音化または、ハ行に置換してしまうことが多い。 「シ」は出るものの「シ」は「ヒ」に近い音になる。 <u>特に文末の</u> 「～しました。」は、「～ひまひた。」に近い音になる。
タ行音	タ行音は舌先が上がるようになってきたので、 <u>比較的</u> 明瞭に発音できる。	舌や口腔内の準備をする必要があるため、 <u>短文中では</u> ハ行音やカ行音に近い音に置換することがある。
ナ行音	<u>比較的</u> 明瞭である。	特になし。
ハ行音	<u>単音では</u> 明瞭である	<u>短文中では</u> 母音化することがある。
マ行音	<u>比較的</u> 明瞭に発音できる。	特になし。
ヤ行音	<u>比較的</u> 明瞭に発音できる。	特になし。
ラ行音	ことばの教室では意識しているため明瞭である。	<u>日常会話では</u> よく r が省略されているのを聞く。
ワ行音	<u>比較的</u> 明瞭に発音できる。	特になし。
その他	・ 単音節復唱検査において「a r a」、「e r e」・・・が 2 年生中ごろまでは、「a h a」か「h a h a」になっていたのが、2 年生の終わりには「a r a」、「e r e」と発音できるようになった。 ・ <u>ことばの教室では、発音をかなり気にしている</u>ため、比較的正しく発音しようと心がけているのか、ゆっくり話したり、あいまいな発音は自分で気付いて言い直したりする姿が見られる。	ゲームなどのように <u>何かに夢中になると</u> 早口になったり、あいまいな発音でも言い直しをしたりすることは少ない。

5. A男に付けたい力と本時の活動内容について

A男の発音の改善には、今まで誤って学習した舌を正しい形や動きにしていくことが大切だと考えている。そのためには、ある程度の筋力が必要なので、口腔筋機能訓練を通して、舌や口の周り、軟口蓋の上げ下げなどの機能を訓練することと併せて、それぞれの筋力をつけることも大切だと考えている。また、A男はサ行音の中でも、口を縦に開けるサ、ソは比較的明瞭に話せるが、口角を横に引くいて学習するセ・スは舌を上げる意識が働かないのか、風の音から有声音のスに変えるときに「s u ・ ・ u ・ ・」になってしまう。シも「ʃ」は出せるようになったものの、ヒに近くなってしまうので、繰り返し練習が必要だと考えている。そのため、本単元では、出せる音を先に行い自信をつけながら進めていくことを考え、時間ごとの重点となる音を、s音は「サ・ソ・セ・ス」の順で行うことにした。シについては、毎時間練習をして、正しい発音を身に付けることを目指す。さらにそれを、支援者（授業者）と一緒にを行う訓練時の環境だけでなく、ほかの児童や教師、保護者との日常会話で再現できるような意識をつけさせたいと考えている。そのための段階として、単音でのサ行音の明瞭化、サ行音を出す意識をした短文練習、サ行音を意識して支援者との会話をする、そして、何かに夢中になって発音への意識が薄れた場面での自分のサ行音への認識を高める必要があると考えた。

さらに、単音や単語、短文で比較的明瞭に発音できるようになった音について、自然な会話の中でも正しい音で発音しようとする意識を高めるために、ポケモンカードゲームを行うこととした。A男はポケモンが大好きで、ポケモンのことをよく知っていた。今までにも、ポケモン図鑑を利用して好きなポケモンをできるだけはっきりと発音したり、そのポケモンの特徴を説明したりしながら発音の練習をしていた。その延長上で、ポケモンのカードバトルができるとさらに活動意欲が高まり、発音への意識が少なくなっている時の発音を正しく認識できると考え、一緒にカードバトルで楽しむこととした。A男はすでに保育園の頃からカードバトルで遊んでいたということで、すぐに意欲を見せ活動することができた。活動中はバトルに夢中になるあまり、少し前の練習で比較的明瞭に出ていた発音が崩れることがよくあった。そこでゲーム中にフィードバックさせてもう一度発音させることにより、より日常会話での発音を気にするようになった。ルールもよく熟知し、決してルール違反はしないものの、性格上、負けそうになると泣いて「それはダメ！」と支援者に待ったをかけることがあった。

今回は、発音を意識しながらゲームを楽しむルールを新たに加えた。練習したことをゲーム中の会話に生かすことを意識し、支援者がサ行音の発音を評価したり、自分で明瞭に出そうとしたりできるよう、よりはっきり伝えるために言い直しを認めて、はっきり話せたことを認めていく中で、ゲーム中でもより発音に意識して話そうとする態度や意欲が向上するものと考えている。

6. 保護者との連携

1年時には、次のようなエピソードがあった。

瀬尻小は複数の保育園や幼稚園から1年生として入学してくるため、A男のことをよく知らない児童もいた。5月頃、A男の発音に興味をもった児童が、A男に苦手なことばを言わせ、言えないことに喜んでいたりがあった。家でそのことばを必死に練習していたA男の姿から母親が気づいて連絡してきた。そこで、担任と連携を取り、1年生にA男やことばの教室に通級している児童がなぜことばの教室に来ているのかを説明した。また、今だからこそ発音が改善しやすいこと、周りの人たちはことばの教室に行っている子がうまく話せるように願っていてほしいこと、わざとやっているわけではないので決して真似をしたり、冷やかしたりしないことで、より早く改善することなどを説明した。

その後、A男をからかうようなことはなくなり、クラスの友達も皆、快くA男や同じクラスのことばの教室へ通う子を送り出してくれるようになった。2年時の終わりには保護者から、「先日、A男が同級生と遊んでいて、A男があまりにも早口で話すので、母親の私もわからない言葉があったんですが、一緒に遊んでいた子が「A男がこんなことを言ってるよ。」と教えてくれました。子どもたちってすごいですね。」という連絡がノートに書かれていた。

現在も、指導場面の参観をしていただいたり、電話でやり取りをしたりするなどしてA男の成長と一緒に見守りながら、今できていることと今後の課題の共通理解を図っている。

7. 市教研のテーマに関わって

市教研の特別支援教育言語部会のテーマは、

一人一人の教育的ニーズに応え、心豊かにたくましく生きる力を育てる教育

発音を明瞭にすることがA男のニーズである。もちろん鼻咽腔閉鎖機能不全症の疑いがあるため、機能的な障がいについては医療機関での治療が必要であるが、発音で悩んでしまい話さなくなるなどの心的な二次障がいを回避することは可能であると考える。A男にとって、口腔筋機能を高めたり、正しい舌の動きや形を獲得したりしていくことは、明瞭な発音を獲得するための教育的ニーズであると考える。また、ことばの教室に来た時には、自分を思い切り表現できるよう、楽しい会話や活動をすることが大切であるとも考えている。

そのため、今回の授業では、サ行音をより明瞭に出すことや、A男が大好きで得意なポケモンカードバトルを行うことで、意欲的に話ができるものとする。また、ゲームに夢中になっている時の発音は日常会話での発音に戻っていることが多いので、その場で意識を促すことで、指導内容がフィードバックされて日常での場面でも活用できるスキルとして身に付けていくのではないかと考えている。

現在は、できるだけA男が勝てるように支援者側が配慮してゲームを進めているが、今後は負けることも経験し、負けた時の対応を身に付けることで、嫌な気持ちになった時やいらいらした気持ちになった時の対処の仕方も学べるようにしていきたいと考えている。

8. 指導計画

時間	ねらい	活動内容	留意点	評価規準
1	○鼻から息が漏れないようにゆっくり長く息を吐くことができる。 ○舌の形や位置を意識し、風の音を出すことができる。	ブローイング 風の音	・ソフトブローイング (ろうそく吹き・火移し) 火を消さないように長く炎を揺らしたり、ろうそくからろうそくへ火を移したりする。 ・ストロー吹きを使った風の音 (ブクブク吹き) 粉ジュースを溶かすために、 s音の舌の形でストローを加え、息を吐く。	6－(2) 言語の受容と表出に関すること ◆鼻からの息漏れをしないよう、軟口蓋を上げる意識をしながらろうそくやストローを吹いている。
2	○鼻からの息漏れをしないよう意識して、風船をふくらますことができる。 ○ゲームに楽しんで取り組み、たくさん会話することができる	ブローイング カードゲーム	・鼻息鏡を使って鼻から息が漏れていないことを確認する。 (風船をふくらます。) ・楽しくゲームをしながら話す。(あまり発音のことを細かく言わずに楽しむ。)	6－(2) 言語の受容と表出に関すること ◆鼻からの息漏れをしないよう、軟口蓋を上げる意識をしながら風船をふくらませている。
3 4	○ストロー吹きや無声音での「シー」などの練習を通して、サ行の発音を単音、短文で発音することで正しい舌の位置や形を覚え、ゲーム中でも正しい舌の使い方を意識しながら発音することができる。 重点となる音 3時間目 (サ・シ) 4時間目 (ソ・シ)	サ行の発音 (単音・単語) カードゲーム	・サ行単音の発音練習 舌の位置、息の吐き方、軟口蓋への意識 ・発音を意識しながら行うカードゲーム (訓練を思い出しながら、サ行音に気を付けて発音し、自分で気付いたり、支援者の評価を聞いたりしながら明瞭にサ行音を発音する。)	6－(2) 言語の受容と表出に関すること ◆正しい舌の位置でサ行音を発音している。 ◆ゲーム中でも訓練したことを意識してサ行音を出している。

5 6 本時 6 時間目	○ストロー吹きや無声音での「シー」などの訓練を通して、サ行の発音を単音、短文で発音することで正しい舌の位置や形を覚え、ゲーム中でも正しい舌の使い方を意識しながら発音することができる。 重点となる音 5時間目（セ・シ） 6時間目（ス・シ）	サ行の発音 （単音・単語・短文） カードゲーム	・サ行単音の発音練習 舌の位置、息の吐き方、軟口蓋への意識 ・発音を意識しながら行うカードゲーム （発音練習を思い出しながら、サ行音に気を付けて発音し、自分で気づいたり、支援者の評価を聞いたりしながら明瞭にサ行音を発音する。）	6－（2） 言語の受容と表出に関すること ◆正しい舌の位置でサ行音を発音している。 ◆ゲーム中でも訓練したことを意識してサ行音を出している。
7 8	○「ちいちゃんのかげおくり」の部分を文末のサ行音を明瞭に発音することを意識して読むことができる。 ○自分の発音の明瞭さに気を付け、自分で言い直しができる。	教科書の音読 カードゲーム	・教科書の「ちいちゃんのかげおくり」を読む。 （特に文末のサ行を意識して読めるように助言する。） ・A男自身がサ行音の不明瞭さに気づいて、言い直しができるよう言葉がけをしていく。	6－（2） 言語の受容と表出に関すること ◆今まで訓練したことを意識しながら、教科書のサ行音を読んでいる。 3－（3） 自己の理解と行動の調整に関すること ◆自分の発音に意識をし、不明瞭な言葉に気づき言い直しをする。

9. 本時のねらい

ストロー吹きや無声音での「シー」などの練習を通して、サ行の発音を単音、単語、短文で発音することで正しい舌の位置や形を覚え、ゲーム中でも正しい舌の使い方を意識しながら発音することができる。

（本時の重点指導の音はス・シ音）

10. 本時の展開（6／8）

流れ	学習活動	・予想されるA男の姿 →支援や留意点 ※録音に関すること
導入	○母音練習 （口形を意識しながら手の動きを付けて行う）	・鏡を見ながら口の開け方を意識して「あいうえお」を言う。 →大きな鏡の前で手振りを付けて一緒に行う。 →口角が上がっているか、「あ」「え」では上の歯が見えるかなどを確認しながら行う。
展開	課題 カードバトルをしよう。 <u>舌の位置や形</u>、<u>口の開け方</u>に気をつけてサ行の発音をしよう。（重点となる音は「ス・シ」）	
	ポイント①（課題の明確化） 児童の実態を踏まえて課題やねらいは具体的に明示する。 ○フリートーク	ポイント②（会話における実態の把握） 会話における発語の状態を把握するために、重点となる音を意識して聞き取りながらフリートークを行う。 →昨日何を食べたかを聞き、支援者も食べたものを言う。今回は支援者がお寿司を食べたことを話す。その中で、サ行のス・シの発音を聞きながら、舌の様子、口の形に意識する言葉がけをする。

	○サ行の単音、単語、短文練習をする。 ポイント④（録音機器等の活用） ・ I Cレコーダーにマイクを付けると、児童の声を確実に録音できる。 ・ I Cレコーダーとパソコンをつなげることで、再生の順番を変えたり、連続再生したりすることが可能になる。 ・ I Cレコーダーやパソコンにパソコン用スピーカーをつなぐと、大きくはっきり再生できる。	・ プリントを読んでサ行（特にス・シ）の発音をする。 →最初に支援者が読んで繰り返したのち、一人で読むようにする。 →後で聞けるように録音しながら行う。 →単語では「モンスターボール」,「マフォクシー」, 短文では,「エネルギーを入れます」など後のゲームに使用する言葉を入れる。 ※ I Cレコーダーで録音し, パソコンで再生する。
	○ストロー吹きの練習（粉ジュースを溶かす）をして s 音の音素を出す。 ○ストロー吸い（ストローを使って溶かした粉ジュースをすする）を行う。 ○ストロー吹きの練習後のサ行の発音を確認する。 ポイント⑤（自己評価の工夫） 単語や短文の練習で録音したものと聞き比べることで、重点となる音について明瞭に発音できたところに気付けるようにする。	・ ストローを上あごと舌で挟んでストローから息を出すように舌や口の形を作る。 →支援者も一緒に行い、ストローから息が出ていることを確認する。 →鼻から息が漏れていないかを鼻息鏡で確認する。 ストロー吹きの練習内容 ・ 粉ジュースの粉をストロー吹きで溶かす。10秒×3回 ・ ストロー吸いで粉ジュースをすすって飲む。3回以上 ・ ストローを抜きながら舌の位置を確認して s 音を出す。5回 ・ もう一度同じプリントを読む。 →ここでは、支援者は読まずに一人で読むようにする。 →改めて録音し、先ほどの録音と聞き比べ、サ行音が明瞭に出ているところがあったら認める。 ※ I Cレコーダーで録音し、前に録音したものと聞き比べられるように再生する。 →同じ短文を「支援者の声→1回目A男の声→2回目のA男の声」と続けて聞けるように、パソコンで音を出すことでA男が自分で発音を聞き分けられるようにする。
	○ゲーム（ポケモンカードバトル）を行う。 ポイント⑥（児童が興味をもって主体的に取り組める活動の設定） 児童が好きなキャラクターのカードゲームを使い、興味をもって楽しく活動しながら、単語や短文で発音できていた音を会話においても正しく発音しようと意識できるようにする。	評価規準 6-(2)◆正しい舌の位置でサ行音を発音している。 ・ ルールを確認して、自分で準備をする。 →ゲームの準備（使用カードカードのシャッフル）は、こちらが意図的に重点の音が意識でき、A男が有利な展開に持ち込めるように、支援者側で行っておき、すぐに始められるようにする。 →明瞭な発音ができなかったときは、もう一度発音するルールを確認する。 →不明瞭な時には、舌の形や位置の確認を行い言い直してもらう。明瞭な時は「はっきりきこえたよ」と認める。特にサ行音がはっきり聞こえた時にはほめる。 →「今は自分で正しく言えたと思うかな？」などの声かけをして、自分でも判断できるように促す。 →前回よりも明瞭になっている場合は「舌の位置や形、口の形や口角が上がっているね」など、具体的な姿を認めていく。 →A男が勝って満足できるようなゲーム進行になるようカードを準備しておく。 ※ゲーム中も I Cレコーダーで部分的に録音をしていく。
まとめ	○ゲーム終了後にサ行の発音をもう一度行う。	評価規準 6-(2)◆ゲーム中にサ行音を意識して、明瞭に発音している。 ・ 口の形や舌の位置に気を付けてカードを読む。 →口の形や舌の位置を見ながら、舌先が上がっていることを認める。 →ゲーム中に録音した発音を確認して、明瞭であるかどうかをA男が判断したり、支援者が判断したりして認め励ます。

ポイント⑦（児童の自己評価から授業の振り返り）

最終的な評価としては、支援者の評価も大事であるが、自己評価が具体的にできたかどうかで判断していくとよい。今回の場合は、舌の位置や形、口の開け方などがA男のことばで表現できるようになるとよい。